

「あ” ッ!♡あ” …ッ♡♡いやあ……っ!♡」

男は少年の反応を確かめるように、奥で張り型を小刻みに動かし、何度も最奥を突きはじめた。

大理石の重さが奥深くにドン、ドン、とぶち当てられるたび、少年の細い躰は浮くように跳ね、乱暴な衝撃に、あきらかな甘い感覚が混ざっているのをわからされてしまう。

「あッ♡♡あ” あ……っ♡いや……っ、あ”♡いやだっああ……ッ♡♡もうだめ……あ” ッ♡♡打たないで……っ」

苦しさすらも、快感をかき立てる一要素になっている。重く丸い貴石の先端が荒々しく孔奥にめり込む衝撃は、折檻か刑罰のようだ。けれど強引に突かれれば突かれる数だけ、穿たれた場所から甘美な痺れがほとぼしり、体内を駆け上がる。

「あ” ッ♡♡あああッ♡ああ……ッ!♡」

突かれる速度が速まり、言葉も継げぬほどになる。

冷たかった石はもはや少年の熱にぬくもり、硬さだけをそのままに少年のなかをさいな苛み続ける。

男は何日目かに、たしか少年の感じやすい場所を前立腺とか呼んでいた。孔の
半ばほどにあるそこを^お圧されると^え得も言われぬほど気持ちよく、あっという間に躰
も頭もとろけてしまうのだが、孔奥すらもこんなに感じるのだとは思わなかった。

「よほど奥を^い苛められるのが気に入ったみたいだな。これじゃ、お仕置きじゃなく
て褒美じゃねえか。まだ許可も出していないのに……こんなに漏らして。悪い奴隷
だ」

「う” ……っ！♡」

背後から伸びてきた男の手が、親指の腹で少年の茎の先端を撫でる。
触れられただけでにちゅっ、といやらしい音が響いてしまうほどに、そこには透
明な液が、朝露のように浮かんでいた。敏感になった竿の先端は、男の指紋の
ざらつきすら感じるほどで、にちゅ、ぬちゅ、と意地悪くそこを^こ捏ねられるたび、
少年はびくびくと何度も腰を跳ねさせる。

「淫乱な奴隷には、もっとお仕置きが必要だなあ？」

「あ” ッ♡♡あ” ッ♡いや” あ……ッ！、♡」

幼茎を^い弄るのをやめてもらえたと思いきや、男は大理石の根元をしっかりと掴むと、

今度は少年のなかを大きく抜き挿ししはじめた。

「ああッ♡♡あああ…ッ♡」

ぐちゅ、じゅぷ、と聞くに耐えない水音があがる。

まろやかに研磨された凶太い棒が、濡れた肉洞を繰り返し行き来する。硬い貴石が通過するたび、熟れた内壁がひくり、ひくりと振れ、悩ましい悦楽が湧き起こる。奥を容赦なく打たれるのも好くて仕方なく、恥辱でしかないこの状況をどこか悦ぶような、やめてほしいのにもっと続けてほしいような、奇妙な感覚にとらわれる。

「はっ。いやだいやだ言いながら、やっぱり悦んでるじゃねえか。わかるか？びっしょびしょだぞ」

「！ひう…ッ♡」

男はやっと手を止めてくれたが、短鞭の先で、みっちり張り型を咥えこまされた窄まりをつついてくる。男が烈しく抜き挿ししたせいもあり、窄まりは暗がりの中でもわかるほど、テラテラと艶めかしく濡れている。その様子を挿すように、今は広げきられた菊状の襞を鞭の先でなぞられ、つつかれる。孔の端からなかの体液が漏れ伝い、太腿のほうまで垂れていくのもいたたまれない。

「前も後ろもびしょびしょだなあ？ほら、腰。何度言えばわかるんだ？そんなにはしたなく振って……」

男は右に左に、少年の耳元へ囁きかけてくる。

その優しいたしなめ方がかえって恐ろしく、少年は必死になって下半身の震えを止めようとするが、うまくいかない。

すっかり充血させられた孔のなかで、張り型に吸いつくように、ずくん、ずくんと脈打っている。それに合わせて入口の窄まりも、きつくて仕方がないはずの張り型を、いっそうきゅうきゅうと締め付けている。その浅ましさを諷めるかのように、鞭の先は肉環を撫でつつき、ついでに丸い尻たぶにまで、ひたひたと鞭の先を当ててくる。

「う…っう……っ、♡」

烈しくなかを犯されるのもつらかったが、こうして尋常でない質量を咥えこまされ放置されるのもつらい。

敏感になった内壁が焦れるように貴石を食い締め、振れている腰の動きがますますはしたなく、大きくなっていくのをとめられない。

「気持ちよくなるのは結構なことだがな……せめてあと二十秒は持ちこたえろよ」

持ちこたえろ、というのはもちろん、吐精を我慢しろ、ということだ。

男は少年を気持ちよくさせようとしてきたり、かと思えばこうして射精を我慢させ、それができない少年を言葉で辱しめ、あげく鞭打ってくる。男の命令が理不尽そのものであることには気づいているが、少年は男が怖くて仕方がない。だから命令通りにしようとするのだが、いつもうまくいかない。

「ん…あ……♡うう……っ♡、」

鞭は痛い。

馬などを調教するのにぴったりの、柄の短^えいよくしなる鞭の先で尻たぶばかりをパンパンと何度もはたかれる——その痛みを思えば、絶対に射精するわけにはいかない。しかし——

「は…あ……っう……っ♡ああ…♡、」

張り型を啜えさせられた肉壺が、ひくん、ひくんと何度も収^{しゅうれん}斂する。

まるで、甘い快感を体内に吸い上げようとでもするように。

(だ……め……感じたく……ないのに……っ！)

内壁が蠢^{うごめ}くたび、挿入^{いれ}られた玩具の凶太さをまざまざと思い知らされる。ずっと

りとしたその質量が怖いのに、肉洞は淫らな感覚ばかりをその玩具から吸い上げる。これ以上自分の躰がおかしくなっていくことには耐えられないし、男からのお仕置きも怖い。なのに——

「んう…ッあ…♡♡ああ……ッ♡、」

ついに少年は下品なほどに宙に向かって腰を突き出しながら、その小さな尻の裏できゅんきゅんと思いきり玩具を締めつけはじめてしまった。

(だめ……止まら…ない……っ)

少年の内壁は今や、痒みにも似たじれったさに支配されていた。尻たぶの肉が痛むほどに後孔を窄め、玩具の硬さを味わうことに夢中になる。

「いけない奴隷め」

「あ” あッ！♡♡」

パンッ！と大きな音が響いて、腰が跳ねあがるほど強く打たれる。

打たれた片尻がジンジンと熱く痺れた。

「あれだけ腰を動かすなど言っただろう？お前は王の前でもそんな卑しい腰使
いをするのか？」

声を荒げることもなく男の冷たい声が出て、

「あッ♡ああ…ッ、！♡ご…っごめんなさ…っ、あ” あッ！♡♡、」

パンッパンッパンッ——！

何度も何度も尻を鞭打たれ、少年の軽い体が浮くように跳ねあがる。芯をもった
ままの幼茎が少年の薄い腹を打ち、その先端からはしとどに液が溢れ、飛び散
る。透明だった液には、もうとっくに白いものが混ざりはじめている。

「あッ♡♡ああっ…！♡いやあ…っ、♡ごめ…なさ……あッ♡いたい……っ、ああ
ッ！♡♡いたいのお……ッ、」

「だったら——その浅ましい腰使いをやめるんだな」

無理な話だった。

男は少年の尻を延々打ち続ける。その衝撃に少年の内壁は窄まり、なかの玩
具をいっそう強く食い締めてしまうのだ。そうして玩具をきゅんきゅん^{むさぼ}貪るうち、
快感はどんどん増してきて——